

2022 (R4) 年 小論文コンクール (テーマは「道」) の応募総数は 174 編 (なお、2021 年は 170 編、テーマは「文」) でした。応募いただいたみなさん、ありがとうございました。

日本では、小学校のうちには読書感想文などで文章を書く機会がありますが、中学、高校と進むにしたがってまとまった文章を書く機会が減ります。また、スマートフォンや SNS が普及して、メッセージの内容も形式も話し言葉とあまり変わらないものになってきました。ところが、高校卒業間近になると、入試や就職試験の小論文、志望理由書などが必要になりますし、大学進学後や社会人になってからは、レポートや卒業論文、ビジネス文書、挨拶状など、正式な文章を書く機会にあふれています。

岩手県立大学の小論文コンクールは、県内高校生のみなさんが書くことへの苦手意識を克服し、書くことの面白さを実感してもらう機会を提供するものです。文章をまとめるというのは、決して楽な作業ではありません。しかし、それは大学や社会の中で必要な作業であるだけでなく、その作業を通じて自分の考えを形づくるという大切な働きも持っています。今回応募してくれたみなさんは、自分自身との対話を繰り返すことで、自分の考えが文章という見える形に発展したことに気づいたと思います。よりよいコミュニケーションのため、そして自分自身の成長のため、みなさんがこれからも文章を書き続けてくれることを願っています。

2022(R4)年、いわて高校生小論文コンクール 講評

作品の評価にあたっては次の 4 つの観点に着目した。

- (1) 与えられたテーマ「道」に沿って、自分なりに論点 (小テーマ) を立てているか。
- (2) 表記、文章表現、文章構成は的確か。
- (3) 自分自身の経験、感覚、思考に基づいた論述となっているか。この点では、自身の生活体験に根ざした論述であることが望ましい。
- (4) 論理的に分析や提言をしているか。

(1) 与えられたテーマ「道」に沿って、じぶんなりに論点 (小テーマ) を立てているか。

今回のテーマ「道」から外れた作品はなかった。しかし、例えば、「道路舗装」という論点を立てて、アスファルト舗装とコンクリート舗装の優劣を論じた場合、舗装という自分なりの論点と「道」というテーマの関連が分かりにくい。つまり、「道」といえばなぜ「舗装」なのかを説明しなければ、テーマを深めようとしていることが伝わらない。

(2) 表記、文章表現、文章構成は的確か。

表記については、全体としてよくできていた。しかし、手書きで字が薄いと、とくにコピーを取った場合に読みづらい。読者である教員には老眼の者もいることを考えると、字は濃い方がよい。誤字はよく見かけた。書き終わった後によくチェックしよう。

文章表現については、口語的な表現が混じったり、主語と述語が呼応していないといった例はあったが、多くはなかった。また、一読して意味の分からないような文はなく、全体としてよくできていた。あえて言えば、一文を短めに終わるよう意識した方がよいであろう。長くても 3 行くらいであろうか。文が長くなると読みづらくなりがちだし、主語と述語が呼応していない、いわゆるねじれた文にもなりやすい。

ところで、文章表現を工夫するとき一般論として言えることは、形容詞や副詞をできるだけ使わず、それを具体的な叙述で表すことである。子どもが感想を聞かれたときに「楽しかったです」「とてもよかったです」といった答え方ををよく見聞きする。文章として表現する場合には、どのように楽しかったりよかったりしたのか、あるいは「楽しい」や「よい」と言わずに楽しいことやよいことを読み手に伝えるにはどう書けば効果的かを考えよう。

文章構成については、とりあえずは段落分けを意識するとよい。段落は内容的に一つのまとまりを持っている。どこからどこまでを一つの段落とし、前後の段落とどういう関係にあるのか（順接、逆接、例示など）をよく考えながら書こう。そうすることで、文章全体の論理構成が明確になってくる。段落が多すぎて段落分けの意味がほとんどなくなっている作品も見られたので、注意してほしい。1,200字ならば、4～6 くらいの段落構成が適切であろう。また、論理的な文章を書くことに慣れないうちは、「したがって」「または」「しかし」「なぜなら」のような接続詞、「それ」「これ」「前者」「後者」「一方」「他方」「第一に」「第二に」のような指示や順序を示す語句を意識し、多用すると論理的な文章になりやすい。もっとも、新聞の記事や社説を読んでみると、このような語句の使用は意外に少ない。つまり簡潔で読みやすい文章は、論理の流れがすんなりと頭に入ってくるので、接続詞や指示語を減らすことができるのである。

論述字数が少ない作品がわりと多かった。この小論文コンクールの場合、字数が少なくても内容で評価されることはある。だが、試験の小論文の場合、字数が少ないだけで失格となることもあるので注意しよう。最少でも制限字数の8割、できれば9割以上は書くべきであろう。

(3) 自分自身の経験、感覚、思考に基づいた論述となっているか。この点では、自身の生活体験に根ざした論述であることが望ましい。

毎年のことだが、(3)で大きな差が出ている。文章でもスピーチや会話でも、その人独自の事例を取り上げた方が、読む人、聞く人は関心を持つ。事例と描写で独自性を出す方が、(4)の論理や主張で独自性を出すより容易である。なお、テレビや新聞でしばしば使われる「ストックフレーズ」（出来合いの文や言葉）を安易に使うのは避けたい。そうしたフレーズが、自らの生活実感や体験に照らして適切な表現なのかを立ち止まって考え、吟味してみよう。誰もが知っているフレーズというものは、実は誰にも訴えかける力がないのかもしれない。独自の事例がなく、だれでも知っている事例を使って論じる場合は、(4)がより重要になる。

(4) 論理的に分析や提言をしているか。

論文やレポートでは必須である。ことに1,200字という限られた字数のこの小論文コンクールの場合、論点を一つに絞って論証することが必要である。いくつもの論点を取り上げては散漫な文章になってしまう。また、(3)で独自の事例を取り上げ、描写に工夫を凝らしたとしても、ただ叙述するだけでは作文とは言っても小論文とは呼べない。論点を一つに絞り込んで、根拠を示し、反論も想定しながら思考を深めて行くべきである。

今回のテーマ「道」は、具象的（物理的）にも抽象的（象徴的）に使われ、多様なイメージを喚起する言葉であり、様々な事例の取り上げ方、論じ方があってよい。

漢和辞典を開いてみると、「道」には次の意味がある。

① 通り道。通路。道路。②人が守り行うべき義理、人の道。③絶対無限の宇宙の原則。④術、しかた、方法。⑤途中。⑥道のり、里程。⑦方面。⑧教え。⑨学問または技芸。⑩専門。（『三省堂 漢和辞典 第四版』三省堂、1990年）

次に、「道」にまつわる具体例を私（評者）なりにメモしてみる。

具象（物理）的な道

子どものころ歩いた道、通学路、寄り道、自分が歩いた山道や古道、新たに開通したバイパスや高速道路、石畳の道、段差のある歩道、絵画や映画の中で描かれた道。

抽象（象徴）的な道

音楽や文学の中で描かれた道、弓道・剣道・柔道・空手道・跆拳道（テコンドー）など武道、書道・茶道・華道・香道など芸道、道家・道教・修験道など宗教や哲学、「人としての道」「道を踏み外す」などと使われる場合の社会規範、「道半ば」などと使われる場合の行程や人生。

とりあえず、思いつくままにメモしてみたが、他にも多種多様な具体例はあり得る。具象的（物理的）な道と抽象的（象徴的）な道は切り離されて存在するわけではない。具象的な道は、抽象的な道の喩えとして用いられることもあれば、具象的な道から抽象的な道へとイメージが深化することもある。

私たちは、文脈や会話の場の中で、多種多様な「道」の意味を使い分けながらコミュニケーションを図っている。日常言語は多様で広がりのあるイメージの中で使われる。そのことが誤解を生むこともあるが、想像力を広げ、コミュニケーションの面白みをも生み出している。この点は、科学や数学で用いられる術語や記号とは異なる。

小論文を書くときには、ただ論理的に明確な文章を書くことだけでなく、イメージの広がりや独自の視点もまた重要になる場合があることを念頭に置こう。

自分なりに具体例をあげて「道」を説明したうえで、さらにその概念を広げたり、深化させたりできた作品がよい作品として選ばれたといえよう。

174編の作品を見渡すと、上記の「具象（物理）的な道」を取り上げている作品は意外に少ない気がした。これは、具象的な物、誰でも知っている物を生き生きと描写するには筆力が必要なことと、論点（小テーマ）として深めることが難しいことからきているのではないか。しかし、「子どものころ歩いた道」のようなありふれた場面から独自に論点を立てることができれば、ユニークな作品となるはずである。

今回の小論文コンクールでは、「抽象（象徴）的な道」を取り上げた作品が多数派だった、武道、書道、人生などである。「野球道」を取り上げた作品も多かった。面白い論点ではある。アメリカ輸入のスポーツが日本では武道と似た修練の道となる。ただし、武道は「型」や礼儀を重んじるだけではなく、独自の精神性、身体観、人生観などを有しているはずなので、難しい論点でもある。

以下では、今回の入賞作品 8 編についてひと言ずつふれる。なお、優秀賞の 2 作品と佳作の 5 作品に付されている番号は評価の順とは関わりない。

作品(1) (最優秀賞) 「道」が表すもの

この作品は、上記評価観点(1)~(4)のどれから見てもよく書けている。(1)については、「道」というテーマの中で「努力」という独自の論点(小テーマ)を提示している。(2)については文章表現が的確であるとともに、文学作品やことわざの取り入れ方がうまい。(3)については自分の生活や文学体験をふまえている。(4)については、いくつかの具体から帰納的に仮説を立てるといった論理的な分析となっている。

しかし、目に見えない道(比喩的に語られる道)をすべて「努力」に還元できるかという点、議論の余地がある。例えば茶道や武道の「道」は努力、精進というニュアンスを含みながら、古典的な形式という意味もあろう。また、悪に手を染めることなどを「道を間違える」と呼ぶ場合も、道とは社会規範のことであり、努力のように自己に内在するものではない。高村光太郎の『道程』は、外在的な「道」を取って内面的に捉え返そうとする宣言にも読める。

作品(2) (優秀賞) 人生の軌跡をたどる

この作品では、体験(部活動)が生きている。読む者に筆者の姿がよく伝わる。道に行き詰まり、思い悩んだとき、これまで進んできた道のりを振り返り、自分の原点に戻って今と将来を見直すと道が開けるかもしれないという主旨の文章である。大切な人生訓の一つと思える。人間は社会的存在なので、他者からの期待に応えようとし、他者から評価されることがうれしい。だが、他人の目を気にしすぎると、自分は空洞化してしまう。ほんとうのところ、自分はいったい何をしたいのか。それを再発見するには、自分には何が楽しく感じられたのかを思い出すことは一つの方法であろう。

作品(3) (優秀賞) 自分に正直に

この作品は「道」を「夢」と言い替えて論じており、論点(小テーマ)設定ができています。この場合の「夢」とは、人生の目標と言い替えることができよう。具体的でかつ高い(困難な)目標を立てると、将来苦しむ可能性が高い。あるいは、夢(目標)をしばしば取り替えなければならなくなる。例えば、大リーガーになる、ノーベル賞作家になる、といった例を考えてみるとわかる。これが例えば、スポーツに関わる仕事がしたい、文章を書くことを仕事としたいといった抽象的で間口の広い夢(目標)だったらどうだろう。この作品にあるように「今を大切に」「自分に正直に」というのも重要だが、自分のこれまでとこれから、そして適性、性格なども考えていないと、自分を見失うことにもなりかねない。

作品(4) (佳作) 私が見つめる柔の道

この作品は柔道に論点(小テーマ)を絞っている。単なる柔道の解説ではなく、自分の体験に基づいた道=人生論となっている。「柔よく剛を制する」は柔道用語としてよく目にする。相手の動きに柔軟に対応しつつ相手の力を利用すれば力やスピードに勝る相手でも投げることができる、という意味に理解していた。しかし、この作品では、「柔」は、礼節、謙譲、利他といった価値なども表すと説明されている。柔道の「道」が形式や方法を示すだけではなく、人生(生き方)にもつながっていることがよく理解できる。しかし、実際の勝負においては、「機先を制する」「先手必勝」という逆の方法が有効なこともある。難題である。

作品(5) (佳作) 二つの道

「歩く道」と「歩む道」という読みの違いから、それぞれが示す道の意味が異なるというのは、面白い着眼である。「あゆむ」は「あるく」に比べて、いささか古風でみやびな雰囲気という言葉である。そのため、日常会話の中で「学校まで歩道をあゆんでいます」といった表現はたしかにしない。そのかわり、「100年のあゆみ」といった象徴的表現によく用いられる。作品中にある「私の道」という例についても、道路を私が所有しているとは想像しにくいので、この道は象徴的な道と捉えるのが一般的である。この作では、こうした読み取りを「一緒に使う漢字」で説明しているが、私たちはもっと広く深い文脈や「場の空気」からそれを読み取っている可能性がある。AIには追いつくことが難しい、人間的能力である。

作品(6) (佳作) 芸術をバトンとして

「道」に独自の解釈をしている作品である。書道の「道」は、上述の漢和辞典の定義にある「④術、しかた、方法」「⑨学問または技芸」の意味ととらえるのが一般的かもしれない。だが、この作品では、書道の経験から、書道をいにしえの書家たちから、わたし、そして未来の書家たちへ続く道と捉えなおしている。これを辞書的な定義に当てはめると「伝統、継承」となるだろうか。漢和辞典の定義にはないが、たしかにそのような含意も読み取ることができそうだ。辞書にある「⑥道のり、里程」を物理的な道ではなく、象徴的な歴史的な道と捉えることでそれが可能になる。

作品(7) (佳作) 最も自然な道

「道」は獣道（けものみち）に始まり、獣道に戻るといふ主旨の作品である。面白い着眼である。けものは、人とは異なり、道を設計し、建設することはない。ただ、その習性にしがたって生きるうちにいつの間にか獣道ができるのである。人にとって道は移動という目的のための手段であるが、ここでは目的のための手段を設計・建設するという点こそが、けものと人とを分ける境界であることがわかる。しかし、人による設計・建設がなくなったとき、道は自然の道＝獣道に戻る。この自然の摂理そのものも、辞書的定義「⑥絶対無限の宇宙の原則」という意味で「道」といえよう。

作品(8) (佳作) たどって、関わる

人生という道は人それぞれに異なるとみなすこともできるし、同じような道をたどった人はたくさんいるとみなすこともできる。同じことを異なる視点から見ることによって、違って見えるのである。考えてみると、人は人生の中で、これら二つの見方を無意識のうちに使い分けている。例えば、絵を描くときに、手本を模倣することもあるし、自分なりに創意工夫を加えることもある。そうやって完成した絵を模倣の絵と見るか、自分の絵と見るかは見方の違いである。これら二つの見方を適宜使い分けることは人生において重要なことである。